

人々善行

めて露はかりも君の恩寵を得んために勉むる心あらば是れ利を計るなり義にあらず凡そ義とは爲すべき事を爲して我が身の利の爲にする私なきを云ふ然れども義理に叶へば人悦び従がひ以て諸事調へ易く行はるゝが故に利は求めずして自から來り利は義に害なく、利を求むるは義に害あり例へば天下に聞ゆる程の善を行へども身の爲めにするに志あるは利なり義にあらず義と利とを分つ事は先づ第一に勉むべき心術なりとす

○第三十八回

人々善行

人々善行

二宮先生は事に臨み折に觸れ人を導き人を教ゆるに先づ善事を行ふべきを以てせられたり、曰く善を行ふとは天性に生れつきたる仁義禮智の本心に從ひて孝悌、忠信、慈愛、恭敬、溫和、辞讓、剛勇廉耻など時に隨ひ事に隨つて行ふを云ふかはかりの善を行なひても名利を願ふ心ありて行ふは誠の善にあらず善を行ふには只々一筋に義理に専らにして名利の心なかるべし之れ即ち善事の行なり

蓋し世人の行は萬事につきて過と惡とあり過とは心に惡なけれども知らずして理に違がひ或は心付かずして理に違ふを云ふ惡とは其の善惡を知りなから愆に惹かれて理に違ふを云ふ是れ自ら欺くなり身を修むるには過惡を改めて善に遷るを勉めとすべし聖人は過ちなきも凡人は過ち無き事なし殊に小人に多とす何ぞ今の世に過ちなき人あらんや、人の諫を聞て用す我に過ちあれども知らずして過ち無

人さ善行

ざと思ふ人あり是れ自ら修むるに志なきが故なり若し自ら修むる人は
 過ち多き事を知るべし故に自ら省みて我が過ちを知り人の諫を聞き
 て我が道を改め以て善に移るべし。人たるもの常に我が身を省みて
 先我が過を知り既に過ちを知りなば速かに改むべし古書に曰く過を
 改めて客ならずと云へり客とは、おしむなり、過ちを惜まずして早
 く改むるを云ふ、孔子も過つては則ち改むるに憚かる事勿れと宣へ
 り即ち我が身の過を知らざるは愚なり過ちを知りて改めざるは之れ
 悪なり知らずして過つより其の罪猶ほ重しとす
 凡て過は必ず、氣質の偏よりおこる、剛なる人は、心強き所より
 過ち起り柔なる人は心弱き所より過ち起る氣質の變なる所に勝て過
 ちなからん事を求むべし、學者、常に我が氣質の變を察し其の過を
 顧みて改むべし斯の如くせざれば、學問の益なし是れ學者の専ら勉

利と義

て行ふべき所なりとす即ち其の過ちを改むるは氣質の變に勝つ道な
 り氣質の變なる所には勝ち難し常に勉めて十分の力を用ゆべきなり
 我が身聖人にあらず君子にあらず故に過ち多きは宜なりとて過ち
 を知りながら改めざる人は無下に道に志なき人なり之れ自暴自棄と
 云ふべし斯様の志なき人に習ひて我が過ちを許すべからず
 人の目は百里の遠きを見る事を得ると雖も其の背を見る不能す明
 鏡と雖も其の裏を照さず雖も我が身の誤を知り難し故に君子の學は専ら
 此を以て人知ありと雖も我が身の誤を知り難し故に君子の學は専ら
 我が身を顧み人の諫めを聞き用ひ過ちを知りて改むるを旨とす論語
 に曰く君子の過ちは日月の蝕の如し過ては人皆な是れを見る更むれ
 ば人皆な仰之ふと云へり君子の心は青天白日の如く洒落にして一點
 の蔽ひなし故に過ちを蔽ひ隠さずして早く改む日蝕月蝕をば天が下

人の道

の人、誰れも仰ぎ見て隠れなし暫し光り欠くれども懸て元の如く明
かになれば日月の光明に少も疵なく君子の過ち斯の如く即ち過ちて
改むるを君子とすべし

◎ 人の道

天照す日は二つなし

正しき道も二つなし

世に二つなき駿河なる

富士の高峯にふる雪の

白きは人の心なり

心の色の白きをば

黒きに染む人々よ

やよ人人よ人人よ

味ひ甘き椎の實は

草を分けても拾ふらん

薫りゆかしき白菊は

露に濡れても手折るらん

勉め勵みて怠らず

正しき道に競へかし

やよ人人よ人人よ

榮華は空に浮ぶ雲

草葉の上の朝の露

必ず頼みに思ふなよ

人の道

千里の堤も蟻の穴

小き事に心おさ

二つ無き日と争へよ

やよ人人よ人人よ

はるけき道も足もとの

只々一足におこるなり

塵もつもとて山となす

忍び堪へつゝ朝夕に

正しき道をたどりゆけ

學びの業をいそしみて

勤儉貯蓄

◎ 勤儉貯蓄唱歌

寝て居て果報待つ人よ

運は天から降りはせじ

先づ夫れよりは精出して

得たる金をば無駄にせず

少しづつでも溜めおきて

皆それ／＼に貯蓄せよ

たとひ日毎に一錢を

積り積むとも初年には

元利積りて三圓餘

十年の後は尙ほ増して

忽ち四十八圓餘

二十年目は百圓を

超えて三十七圓餘

三十年目は更に又た

二百九十六圓と

三十錢餘に上るべし

斯て利に利を積み重ね

五十年目となる時は

元金壹百八十圓

利子とも一千百餘圓

是れを思へば一厘も

空にはならぬ者ぞかし

一錢二錢はありとても

又た無きとても同じこと

捨てた積りて貯蓄せよ

左すれば自然當にせぬ

勤儉貯蓄

果報も何時か来るべし

運も必らず廻り來ん

金を湯水とまぐ人よ

金は地からは湧はせじ

有るに任せて費やさば

忽ち地所も家地も

株も他人の物となり

一家眷族悉く

路頭に迷ふに至るべし

斯る憂目を求めず

勤儉貯蓄

又た身代を傷けず

上手に遣ふ手段あり

例へば茲に百圓を

或る銀行に預け入れ

其儘十年据置かば

利子のみ何時か八十圓

又た五十年据置かば

一千八百十餘圓

五十餘圓の利子を得ん

之れに準して相當の

預金をしつゝ遣ひなば

損する憂ひ更になく

遊山保養も思ふまゝ

云はゞ只にて一生涯

樂に遊んで往けるなり

之れを思へば不足なき

人は尙更用意して

無駄の費の半ばなり

三分一なり預け置き

後日の爲を計るべし

勤儉 二 宮 尊 德 翁 終

勤儉貯蓄

左すれば心長閑やかに

何時も程よく暖かく

我が懐は春ならん

あゝ世の中の樂みは

げに勤儉と貯蓄のみ

人人勵め諸共に

勤儉貯蓄に心して

國家の富強を謀るべし

明治四十二年九月十日印刷

明治四十二年九月十日發行

不許複製

編纂者

中村德助

發行者

關由藏

東京市下谷區仲徒町一丁目六番地

印刷者

井出五三九

東京市日本橋區若松町廿一番地

印刷所

日進社

東京市日本橋區若松町廿一番地

發行所

由盛閣

東京市下谷區仲徒町一丁目六番地

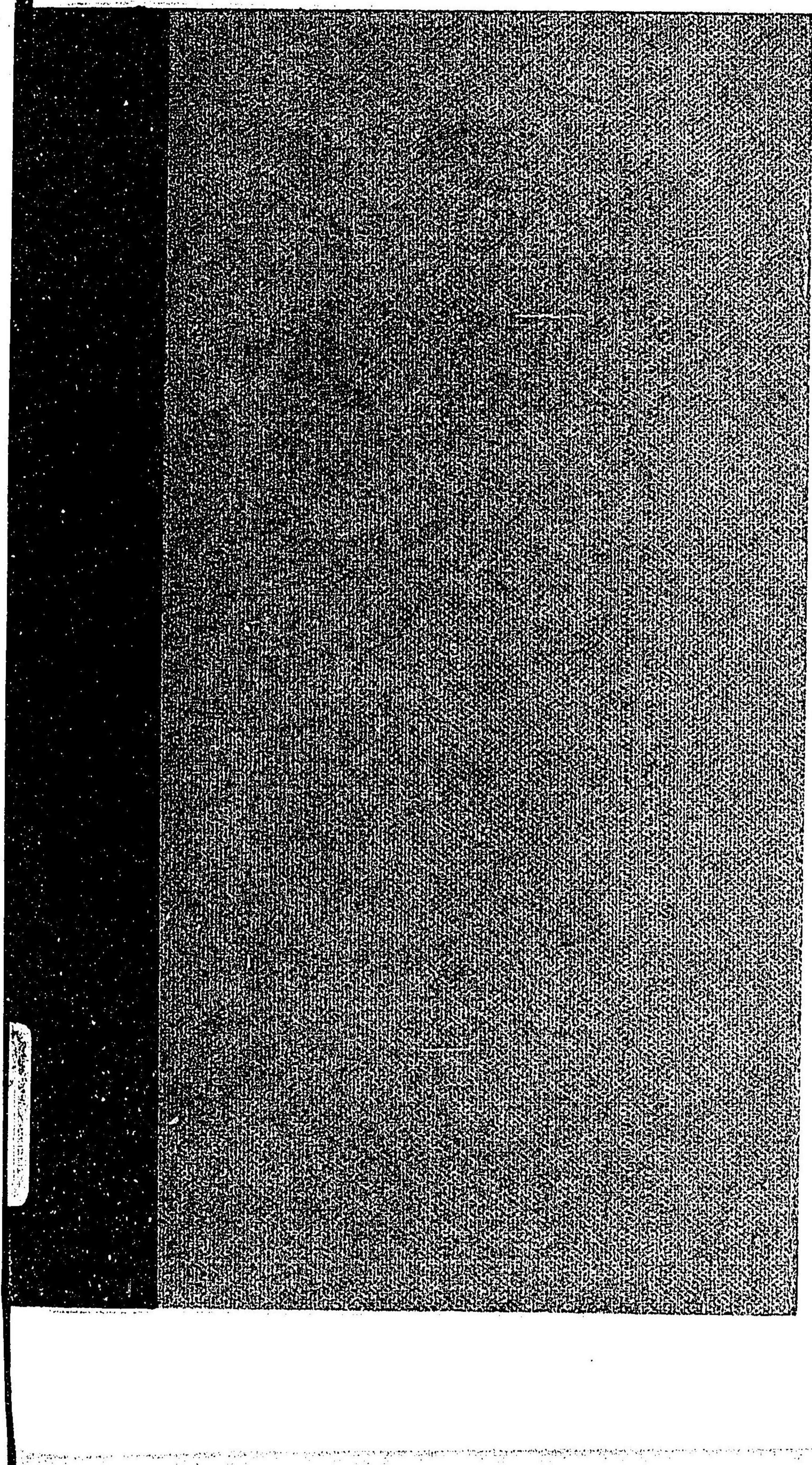
(定價金二拾七錢)

二宮德翁與附

259
577

II-2X30





特20
354

011857-000-1

特20-354

二宮尊徳翁（勤儉立志）

中村 徳助／編

M42

AAF-0135

